

軍事史学

第55卷 第1号

巻頭言

戦争に勝つ政府の役割

村井友秀

戦争に勝つとは、損害が国民の許容限度を超える前に戦争目的を達成することであり、戦争に負けるとは、戦争目的を達成する前に損害が国民の許容限度を超えることである。

基本的にはその国の文化が損害の許容限度を決定するが、戦争目的に関わる利益が損害の許容限度に大きな影響を与える。第二次世界大戦において米国は、三〇万人以上の戦死者を出しながら戦争を止めずに戦い戦争に勝利した。他方、ベトナム戦争で米国は五万人の戦死者が出ると戦争を止めて撤退し、戦争目的の達成を放棄して戦争に負けた。この二つの戦争で損害の許容限度が大きく異なるのは、二つの戦争に関わる米国の利益が違うからである。第二次世界大戦は米国が負ければ米国本土が敵に占領される可能性がある総力戦であり、米国本土の安全という死活的に重要な利益が関わる戦争であった。米国民は死活的に重要な利益を守るためには、大きな損害に耐える。他方、ベトナム戦争は共産主義が世界に広がることを阻止するという米国の国際的影響力（戦略的利益）を守る戦争であり、米国本土の安全が脅かされる心配のない戦争であった。戦略的利益を守る戦いの損害の許容限度は、死活的に重要な利益を守る戦いの損害の許容限度よりも低い。

戦争は、軍隊の戦闘能力と国民の戦う意志によって支えられている。国民の戦う意志が崩壊すれば、戦争に負ける。米国より戦闘能力が劣る北ベトナムの戦略は、米国民の戦う意志を挫くことであった。北ベトナムは、米国から一万キロ離れたアジアの小国で戦う戦争が米国本土の安全とは無関係であることを喧伝して米国民が耐えられる損害の許容限度を下げ、同時に大兵力が展開できない「兵を呑む」ジャングルで米軍が不得手とするゲリラ戦を戦うことによって、米軍の損害が許容限度を超えるように戦った。その結果、米軍の損害が五万人を超えた段階で米国民の戦う意志は崩壊し、米国は戦争に負けた。他方、北ベトナムは戦争目的が民族の統一と独立という死活的に重要な利益であると主張して国民の損害の許容限度を高め、三〇〇万人以上の損害に耐えた。

戦争に勝つために政府がやるべきことは、戦争目的が自国にとって死活的に重要な利益であることを国民に説得して損害の許容限度を高め、同時に敵国にとって戦争は周辺の利益に過ぎないことを敵国民に宣伝して敵国の損害の許容限度を下げることである。

（日本防衛学会会長）